

# 自然体験・自然遊びに関する考察

——保育者養成の観点から——

柞 磨 昭 孝\*

## Consideration of Nature Experience and Nature Play

——From the Perspective of Childcare Worker Training——

Akinori TARUMA

**Key words** : 自然体験 nature experience, 自然遊び outdoor play, 保育士養成 nursery teacher training

### 1. はじめに

一般に、自然体験は自然を対象とした活動を通して、自然事象・現象等への興味・関心を高めたり、理解を促したりするものであり、自然遊びは自然と触れ合うことで、楽しみながら知的好奇心や探究心等を育むものとされている<sup>1)</sup>。目的的活動であるかどうかの差異はあるものの、両者に共通することは、自然との触れ合いを通して、自然とのつながりを深め、生活に豊かさをもたらす効果が期待できることである。たとえば、文部科学省が行った調査の報告書<sup>2)</sup>によると、子どもの自然体験はその後の成長に、自尊感情や社会性、精神的な回復力を高めるなど、多くの良好な影響を与えることが明らかにされている。このほかにも、心理的、社会的、身体的能力の向上や問題解決力、学習意欲等の向上について多くの報告がされている<sup>3-7)</sup>。

しかし、一方、「経験の消失」という言葉に代表されるように、身近な自然との関わりが失われつつあり、この傾向はとりわけ幼少期の子どもや児童・生徒が自然と触れ合う機会の減少として問題となっている。たとえば、全国規模の調査<sup>8)</sup>によると、子どもの自然体験を比較すると、ほとんどの項目で自然体験が減少している傾向が明らかになっている。さらに青少年についても、コロナ禍を経て体験活動が減少していることが報告されている<sup>9)</sup>。曾我<sup>10)</sup>らは、子どもが自然の中に身を置かない状態が長く続くと Nature Deficit Disorder (自然欠損障害) と呼ばれる病を患う危険があるという指摘を紹介し、実際、「落ち着きのない子」「無気力な子」「物事に集中でき

ない子」の増加は自然体験の不足によるものだと考える研究者も多く、今日では定期的な自然との触れ合いは我々が健全な生活を送るうえで欠かせないものであると述べている。

以上のことを踏まえ、本稿は、自然との触れ合いの機会の消失という問題についてその内実を探り、保育者養成の観点から自然体験や自然遊びの意義や実施上の課題等を検討するとともに、保育実践に生かすための指針を得ることを目的とする。

### 2. 自然体験のもつ意義

#### (1) 自然体験減少の背景と課題

自然体験をしたことがない子どもの割合が増加していることの背景には、生活様式、価値観、社会環境等の変化などが挙げられる<sup>11)</sup>。子どもたちが自然と触れ合う機会が単に減少しているだけでなく、友達や家族と一緒に自然体験をする割合も減少していることも報告されている<sup>12,13)</sup>。菅野<sup>14)</sup>は、このことに関連して「現代人は子どもも大人も自然と関わる機会が減少していて、そのせいで気づかないうちに『自然欠乏症候群』を起こしている」と述べている。こういったことの背景として、たとえば河合<sup>15)</sup>は、核家族化と少子化を前提として、子どもが部屋に閉じこもりがちになり、一人遊びが圧倒的に多く、しかも物と遊ぶケースが多いことを指摘している。関連して、曾我ら<sup>16)</sup>は「自然に対して興味が薄い親や教師の元で育った子供は、無意識のうちに自然に対する関心がそがれ、自然体験に対する意欲も低下することが知られている。また、社会全体の自然環境に対する価値観

\* 広島文化学園短期大学保育学科

が低下すれば、身近な場所に自然と触れ合う環境保全しようという機運は起こらないだろう」と述べている。

岡本<sup>17)</sup>は、こういった状況について「現代のライフスタイルは自然の影響できるだけ排除するために努力していると言っても過言ではない」と述べ、さまざまな生活様式や価値観を知るために、世代間交流によって、子どもたちの選択肢を増やすことの重要性を指摘している。

このような状況を背景として、幼稚園教育要領<sup>18)</sup>や保育所保育指針<sup>19)</sup>には、幼児が自然と触れ合いながら成長するための考え方が述べられている。

幼稚園教育要領においては、幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付くこと及び自然への関心を持ち、不思議さや尊さに気付くことが重視されている。遊びについては、幼児の自発的な活動であり、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であるとされている。

保育所保育指針においては、自然とのふれあいを体験し、自然の変化などを感じ取りながらさまざまなことを学ぶ遊びが推奨されている。また、身近な動植物に接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする生命の尊重に関する事柄が示されている。保育者に対しては、子どもが自発的に活動し、様々な経験を積むことができるような環境を整えることが求められている。

## (2) 子どもにとっての自然

高橋<sup>20)</sup>らは、子どもにとって自然の意義について、奥井智久(1979)の考え「第一に、子どもの内なる自然は、感性を養い人間性を豊かにする。第二に、好奇心の対象となり、自然の不思議さを探る時科学心が芽生え、筋道を立てて考えるようになり、理性が啓発される、第三に、自然素材を製作する過程で技能を身につけ、生活に適応する」を紹介し、「感性・理性・技能は、相互に作用し合い、子どもの多様な発達を促す」と述べている(下線筆者)。

また、菅野<sup>21)</sup>は、自然には関わり方の多様性があるので、どんな子どもにも必ず居場所があるとし、子どもは自然と親和性が高いと述べている。さらに、自然には思いどおりにならないままならないさがあるがゆえ、子どもがへこたれない力状況に合わせて、自分が変化して行く力が育っていく余地があるとし、自然の不便さを内包する自然は優れた育児環境と言えるのではないかという捉えを示している。

河合<sup>22)</sup>は自然を「場」として捉え、美的な環境の場、感性を磨く場、命のあるものと我々自身の命の交流の場、自然に対して謙虚な心が芽生える場、体力増進の場という5つに整理している。子どもの発達を促すという観点から、自然体験は、いわゆる、「心・技・体」のいずれにおいても意義をもつものと言えるであろう。

## (3) 体験活動がもたらすもの

独立行政法人国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センターの調査<sup>23)</sup>によれば、自然体験の多い青少年には、道徳観や正義感があり、学習意欲や課題解決意欲が高いことや積極性や協調性が高まり、判断能力を育てるといった社会性の育成に効果が高まるなど、広く資質・能力等の育成に寄与する可能性があることが示されている。このほかにも、誘発・創出<sup>24)</sup>、自己防衛能力・規範意識<sup>25)</sup>、心理的社会的能力・身体的能力<sup>26)</sup>などの醸成や向上があるという報告もある。ここで、さらに視野を広くして、体験活動が青少年にどのような効果をもたらすかについてみておきたい。青少年の体験活動の推進に関する調査研究<sup>27)</sup>の回帰分析の結果からは、「体験がその後の状況に及ぼす影響・効果」について、「自尊感情」や「外向性」等について正の関連性が見出されている。また、関連のヒアリング調査では、それぞれの体験活動の実施主体が様々な形でその影響・効果を認識していることが把握され、活動内容と影響・効果との結び付きが強いことが示されている。

教育再生会議の第十次提言<sup>28)</sup>では、「自己肯定感をバランスよく育むには、自然体験活動や集団宿泊体験、職場体験活動、奉仕体験活動、文化芸術体験活動といった様々な体験活動を通じて、達成感や成功体験等を得るとともに、失敗や挫折を経験したときに、自分を受け入れ、課題に立ち向かう姿勢を身に付けることが重要である」とし、体験活動と自己肯定感の育成について述べ、指導要領改訂に向けた提言を行っている。これは体験活動が目的的活動であり、これを学校、社会教育施設や行政の役割の1つとして示したものであり、これは主体性の発露による自然遊びやその機会が減少しているという認識が背景にあるものと思われる。

## 3. 本学科の学生の実態調査

### (1) 調査の目的

本学科の学生の多くは将来保育に携わり、様々な機会を通して幼児期の子どもたちの発達を支援する。その中には、子どもたちが自然と触れ合う場面も少なくないはずである。保育養成機関では、領域「環境」の授業で自然体験や自然遊びについて学ぶ。前田<sup>29)</sup>は所属の幼児保育学科において、生物(草花や虫)に対する学生の好感度を調べている。好き嫌いという心情は個人的なものであるように感じられるが、前田は「幼児にとって未知の存在である草花や虫に対する保育者の対応は、生涯にわたって保持される子どもたちの心情の基盤ともなるもので、その影響力は極めて大きい。したがって、保育者の生物に対する心情のあり方は決して私的なものではなく、職業的な資質として重要な役割を果たすことになる」と述べ、保育という職業に対して、好き嫌いは個人的な心情の域にとどまらないことを示している。永井<sup>30)</sup>らは虫

に対する苦手意識について調べ、学生の苦手意識を克服する指導について論じており、虫に触れることができるようになるなど、虫とのかかわり方が向上したことを「保育者効力感」の語で表現している。さらに「自然とかかわる保育」を実践できる優れた指導力を持った保育者を養成したいと思っている養成校教員が多いにもかかわらず、ほとんどの養成校教員が、自然体験の不足を意識しながら、それを養成校の授業で補うことができない葛藤を課題として紹介している。

これらのことを踏まえ、領域「環境」の指導にかかわって、実際に本学科の学生が自然に対してどのような意識をもっているのかを探り、それを元に学生の実情に応じた指導のあり方や指導方法の改善を図ることにした。

## (2) 自然に対する意識調査

### ア 令和4年度のアンケート結果

令和4年度保育学科1年次生の領域「環境」の選択者に対して行った、自然や植物・昆虫に対する好感度についてのアンケート結果を表1に示す。

この結果から、「自然が好き」は80.4%であるが、「理科が好き」は34.8%と半数に満たないことがわかる。理科は主に自然を対象とする科目であるにもかかわらず好感度が低いのは、これまでの学習において理科的なアプローチがあまり受け入れられていないことを示唆している。植物を育てたり、動物を飼ったりという経験は少ない。一方、「昆虫が好き」は15.5%と低く、「昆虫に触ることが苦手」は80.7%と非常に高い割合を示しており、昆虫の好感度に関する先行研究と同様の傾向であった。

### イ 令和5年度の調査

令和4年度の調査を踏まえ、保育学科学生について、自然や自然体験等についてさらに詳しく調べることにした。調査に用いるアンケートは国立若狭湾青少年自然の家が保育施設に勤務している幼稚園教諭や保育士を対象とした意識調査「自然体験活動等に関するアンケート」<sup>31)</sup>を参考にし、自然や自然体験に関する10個の質問項目に、植物・動物への好感度の質問項目を加えて作成した(図1)。

## ウ 調査対象・時期

### 1) 令和5年度調査

調査対象：保育学科1年生(令和5年度入学生)及び2年生(令和4年度入学生)

調査時期：10月下旬～11月初旬

### 2) 令和6年度調査

調査対象：保育学科1年生(令和6年度入学生)及び2年生(令和5年度入学生)

## 4. アンケート調査の結果と分析

### (1) 各アンケート調査項目の結果について

アンケートの調査項目 Q1 から Q10 について結果を整理し、傾向や特徴等进行分析する。

#### Q1 自然に対する関心の程度

いずれの年度の学生についても高い割合で「関心がある」と回答しており、学生の自然に対する関心は高いといえる(表2)。令和5年度1年生については「関心がある」(57.7%)で、他の年度・学年(いずれも70%以上)に比べて低いようにみえるため、令和5年度1・2年生で検定(マンホイットニーのU検定)を行ったところ、 $p=.353$ で有意な差は認められなかった<sup>32)</sup>。

#### Q2 森、山、海、川などのある場所に出かけた目的

令和5年度の1年生と令和6年度の2年生を比較することで1年次から2年次にかけての変化の様子がわかる(表3)。全体的にほぼ大きな変化はないが、「ドライブを楽しむため」が2年次に1位となっており、その割合も約3倍に増えている。「海や山の美しい自然の風景を楽しむため」が2位であることを考えると、これは運転免許取得者の増加の影響とともに、ドライブが自由な移動手段であり、好きなところに行くことを可能にし、気分転換の手段となっているものと思われる。

#### Q3 自然遊びについてのイメージ

表4に、質問項目3についての選択肢別の度数と割合を示す。「さわやかで開放的だ」が16.6%で最も多く、「虫に刺されたりする」15.5%、「リフレッシュできる」15.1%と続く。虫に対してのイメージを垣間見ることができる。

この設問の選択肢には、自然遊びに対するポジティブな要素とネガティブな要素が含まれているため、割合や順位だけでは考察を深めることができない。そこで主成分分析を行い、関係性を調べた。その結果を表5に示す。

表1 自然や植物・昆虫に対する好感度について調査(%)

N = 46

	自然が好き	理科が好き	植物を育てている	動物を飼ったことがある	昆虫が好き	昆虫に触ることが苦手
とても当てはまる	26.1	8.7	34.9	71.7	2.2	47.8
当てはまる	54.3	26.1	23.3	8.7	13.3	23.9
あまり当てはまらない	17.4	45.7	14.0	4.3	28.9	15.2
当てはまらない	2.2	19.6	27.9	15.2	55.6	13.0



<p>Q 1 自然についてどの程度関心がありますか。次の中から1つ選んでください。</p> <p>① 非常に関心がある</p> <p>② どちらかといえば関心がある</p> <p>③ あまり関心がない</p> <p>④ まったく関心がない</p> <p>Q 2 この1年の間に森、山、海、川などの自然の多い所に出かけたことがありますか。</p> <p>それはどんな目的からですか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。</p> <p>① 海や山の美しい自然の風景を楽しむため</p> <p>② 動植物などの自然を観察するため</p> <p>③ 登山、ハイキング、海水浴、キャンプなどを楽しむため</p> <p>④ ドライブを楽しむため</p> <p>⑤ 釣りや潮干狩り、山菜つみなどを楽しむため</p> <p>⑥ スキーやサーフィンなどのスポーツを楽しむため</p> <p>⑦ 出かけたことはない</p> <p>Q 3 自然遊びについてどんなイメージをもっていますか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。</p> <p>① さわやかで開放的だ</p> <p>② 実際に遊ぶとなると面倒くさい</p> <p>③ 楽しいことが多い、明るいイメージ</p>	<p>④ 汚れたりする</p> <p>⑤ 手軽にできる遊びが少ない</p> <p>⑥ 虫に刺されたりする</p> <p>⑦ 感受性が豊かになる</p> <p>⑧ 疲れる</p> <p>⑨ リフレッシュできる</p> <p>⑩ 遊べる場所が不便なところにある</p> <p>⑪ 危険と隣合わせことが多い</p> <p>⑫ その他</p> <p>Q 4 室内と屋外(自然など)での遊びのうち、どちらが好きですか。</p> <p>① 室内での遊びのほうが好き</p> <p>② 屋外での遊びのほうが好き</p> <p>③ どちらともいえない</p> <p>Q 5 室内と屋外(自然など)での遊びのうち、この1年ではどちらが多かったですか。</p> <p>① 室内での遊びのほうが多かった</p> <p>② 屋外での遊びのほうが多かった</p> <p>③ 同じくらいだった</p> <p>Q 6 自然遊びについて、これまで最も多く体験した時期は次のいつ頃ですか。次の中から当てはまるものを1つ選んでください。</p> <p>① 園児 ② 小学生 ③ 中学生 ④ 高校生 ⑤ 現在</p>
<p>Q 7 自然遊びをしにくくなっているとしたら、その原因は次のうちどれだと思いますか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。</p> <p>① 身近な自然環境が減少しているから</p> <p>② スマホなど室内での遊びのほうが楽しいから</p> <p>③ 簡単に楽しめる自然遊びを知らないから</p> <p>④ 自然遊びを経験しない大人が増えてきているから</p> <p>⑤ からだを動かしたりするのが面倒になっているから</p> <p>⑥ 自然遊びを一緒にする仲間が少ないから</p> <p>⑦ お金がかかるようになってきているから</p> <p>⑧ 忙しくて時間を確保する余裕がなくなっているから</p> <p>⑨ その他</p> <p>Q 8 幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことのメリットはどんなことだと思いますか。</p> <p>次の中から、当てはまるものをすべて選んでください。</p> <p>① 運動能力・体力・健康の増進につながる</p> <p>② 自然・環境問題に関心を持ちやすくなる</p> <p>③ 自然や生命を大切にする心が育まれる</p> <p>④ 精神的にたくましくなる</p> <p>⑤ 知的好奇心が育まれる</p> <p>⑥ コミュニケーション能力が高くなる</p>	<p>⑦ 探究心が強くなる</p> <p>⑧ その他</p> <p>Q 9 幼児期の子どもにとって、自然の中で遊ぶことはどのくらい重要だと思いますか。</p> <p>① とても重要</p> <p>② どちらかといえば重要</p> <p>③ あまり重要でない</p> <p>④ まったく重要ではない</p> <p>Q 10 子育てをする場合、子どもと自然の中で過ごす機会はどの程度だと思いますか、当てはまるものを1つ選んでください。</p> <p>① できるだけ多く持ちたいと思う</p> <p>② 休日であれば持ちたいと思う</p> <p>③ できればあまり持ちたくない</p> <p>④ まったく必要ないと思う</p> <p>Q 11 花や植物、昆虫、お魚(メダカや金魚など)、小動物(ウサギ、犬、猫など)はどのくらい好きですか。それぞれ、その度合いを次の5～1で答えてください。</p> <p>5 とても好き 4 まあまあ好き 3 どちらともいえない</p> <p>2 あまり好きではない 1 まったく好きではない(嫌い)</p> <p>① 花や植物 ② 昆虫 ③ お魚 ④ 小動物</p>

図1 アンケート調査の質問項目

変数が多いこともあり、第1主成分と第2主成分の寄与率が35%弱なので分析が大まかなものになることは否めないが、この結果から読み取ることができる関係性を

グルーピングすると、次のようになる。a)～c)に含まれる各項目は寄与率の大きい順に記している。

a) ②実際に遊ぶとなると面倒くさい、⑧疲れる、⑩

表2 自然に対する関心の割合 (%)

	R5 年度		R6 年度	
	1 年生 N=26	2 年生 N=37	1 年生 N=39	2 年生 N=32
非常に関心がある	15.4	18.9	30.0	15.6
どちらかといえば関心がある	42.3	51.4	70.0	59.4
あまり関心がない	34.6	27.0	0.0	25.0
まったく関心がない	7.7	2.7	0.0	0.0

表3 自然に対する関心の割合 (%) と順位

出かけた目的	R5 年度				R6 年度			
	1 年生		2 年生		1 年生		2 年生	
	N=26	順位	N=37	順位	N=39	順位	N=32	順位
海や山の美しい自然の風景を楽しむため	23.1	1	32.9	1	39.6	1	25.7	2
動植物などの自然を観察するため	7.7	7	3.9	6	10.4	4	5.7	6
登山, ハイキング, 海水浴, キャンプなどを楽しむため	15.4	3	18.4	3	14.6	3	8.6	4
ドライブを楽しむため	11.5	4	26.3	2	20.8	2	34.3	1
釣りや潮干狩り, 山菜つみなどを楽しむため	11.5	5	6.6	5	8.3	5	8.6	5
スキーやサーフィンなどのスポーツを楽しむため	11.5	6	3.9	7	4.2	6	0.0	7
出かけたことはない	19.2	2	7.9	4	2.1	7	17.1	3

表4 自然遊びに対するイメージの割合等

	N = 46											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
度数 (人)	89	16	64	62	12	83	43	26	81	21	35	3
割合 (%)	16.6	3.0	12.0	11.6	2.2	15.5	8.0	4.9	15.1	3.9	6.5	0.56
順位	1	10	4	5	11	2	6	8	3	9	7	12

表5 自然遊びに対するイメージの主成分分析結果

N = 134

	標準化した主成分											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
①	-.372	.337	-.186	.341	.058	.213	.036	-.128	-.221	.416	-.083	.550
②	.388	-.060	.474	.211	.069	-.253	.115	-.024	-.311	-.005	-.600	.194
③	-.126	.335	.148	-.316	.593	.036	-.298	.379	.301	.018	-.267	.055
④	.411	.334	-.104	-.067	-.224	.035	-.142	-.076	.098	.664	-.124	-.401
⑤	.260	.043	-.228	.585	.287	-.377	.018	-.097	.523	-.055	.142	.075
⑥	.379	.239	-.093	-.248	-.283	.002	-.496	-.223	.032	-.307	.089	.501
⑦	-.106	.375	.190	.275	-.539	.204	.183	.396	.329	-.275	-.168	-.035
⑧	.305	.027	.548	.042	.205	.478	.198	-.078	.108	.123	.493	.136
⑨	-.132	.522	.150	.228	.182	-.031	-.175	-.348	-.352	-.341	.120	-.442
⑩	.298	.002	-.466	-.025	.231	.564	.296	-.149	-.002	-.282	-.357	-.080
⑪	.299	.301	-.257	-.090	.087	-.238	.315	.541	-.419	-.040	.323	.086
⑫	.126	-.310	-.071	.439	.028	.316	-.584	.418	-.245	.007	.045	-.108
固有値	2.322	1.827	1.152	1.097	0.961	0.905	0.882	0.769	0.641	0.539	0.514	0.390
寄与率	19.35	15.22	9.60	9.14	8.01	7.54	7.35	6.41	5.34	4.49	4.29	3.25
累積寄与	19.35	34.57	44.18	53.31	61.32	68.86	76.21	82.62	87.97	92.46	96.75	100

遊べる場所が不便なところにある, ⑤手軽にできる  
遊びが少ない

b) ④汚れたりする, ⑥虫に刺されたりする, ⑪危険

と隣合わせことが多い

c) ①さわやかで開放的だ, ⑨リフレッシュできる,  
⑦感受性が豊かになる, ③楽しいことが多い, 明る

### イメージ

a) のグループは、自然遊びに対するネガティブなイメージで、どちらかという「自然遊びを避けたい」という気持ちがあるので、第1主成分を「忌避傾向」とする。

c) のグループは、自然遊びに対するポジティブなイメージで、明らかに自然遊びを肯定的にとらえている。これを第2主成分とし「感受傾向」とする。これを2軸とすると、b) のグループは第1主成分が強く、第2主成分が弱いグループとなる。「①さわやかで開放的だ」は、第1主成分は $-0.372$ で(=忌避傾向が弱い)で、第2主成分が $+0.337$ (=感受傾向が強い)というように整理することができる。なお、自然に対する関心の強さと第1主成分について、スピアマンの順位相関係数を調べると、「実際に遊ぶとなると面倒くさい」( $p<0.01$ )で、「疲れる」( $p<0.05$ )のように有意な相関が認められた。

**Q4** 室内と屋外(自然など)での遊びのどちらが好きか

**Q5** この1年間で、室内と屋外(自然など)での遊びのどちらが多かったか

この2つの設問については表6に示す結果となった。

同じクラスで経年変化をみると、1年次には屋外遊びを好む割合(Q4)が屋内遊びを好む割合より高いが、2年次には逆転する。1年間での遊びの実態(Q5)をみると、学年が進むと屋内遊びが大きく増えている(28.8ポイント)。しかし、1年生を入学年度で比べると大きな差は見受けられない(屋内遊びの増加についてカイ二乗検定を行ったところ $p=.710$ であり有意な差があるとはいえない)。したがって、統計的にみて入学年度における差異はなく、増加・減少が進んでいるという傾向は認められない。2年生についてみると、2023年度よりも2024年度のほうが、屋内遊びを好む割合、屋内遊びを行った割合ともに高い割合を示しているが、同様に有意な差があるとはいえない(それぞれ $p=.267$ ,  $p=.197$ )。この傾向については、さらに調査期間を広げることでより蓋然性が高まるため、今後も継続して取り組むこととしている。

表7に屋内・屋外遊びの志向性と実際の遊びの多さとのクロス集計を示す。

この結果から、屋内遊びを好む学生は屋内遊びが、屋外遊びを好む学生は屋外遊びが多かったことがわかる。しかし、屋外遊びが好きな学生であっても実際には屋内

表6 屋内遊びと屋外遊びについて

2023年度から2024年度への変化(%)						
	Q4			Q5		
	増減			増減		
	2023年度	2024年度	2024-2023	2023年度	2024年度	2024-2023
屋内遊び	38.5	56.3	17.8	46.2	75.0	28.8
屋外遊び	42.3	43.8	1.4	42.3	21.9	-20.4
どちらとも言えない	19.2	0.0	-19.2	11.5	3.1	-8.4

1年生：2023年度と2024年度との差異(%)						
	Q4			Q5		
	増減			増減		
	2023年度	2024年度	2024-2023	2023年度	2024年度	2024-2023
屋内遊び	38.5	38.5	0.0	46.2	51.3	5.1
屋外遊び	42.3	43.6	1.3	42.3	38.5	-3.8
どちらとも言えない	19.2	17.9	-1.3	11.5	10.3	-1.3

2年生：2023年度と2024年度との差異(%)						
	Q4			Q5		
	増減			増減		
	2023年度	2024年度	2024-2023	2023年度	2024年度	2024-2023
屋内遊び	40.5	56.3	15.7	56.8	75.0	18.2
屋外遊び	54.1	43.8	-10.3	37.8	21.9	-16.0
どちらとも言えない	5.4	0.0	-5.4	5.4	3.1	-2.3

表7 屋内遊びと屋外遊びの志向性と実際に行った遊びの多さ(度数)

どちらが多かったか				
	屋内	屋外	同じくらい	合計
どちらが好きか	屋内	48	9	57
	屋外	20	37	57
	どちらともいえない	9	1	10
合計	77	47	10	134

遊びが多かった学生が少なくなく、屋内遊びが好きな学生で実際には屋外遊びが多かった学生の2倍以上いることに留意したい。「屋外遊びが好きな学生であっても実際には屋内遊びが多かった学生」20人について、Q7（後述）との関連で、自然遊びをしにくくなっている原因としてとらえているものを割合の高いものから順に並べると、「スマホなど室内での遊びのほうが楽しいから」65%、「からだを動かしたりするのが面倒になっているから」40%、「身近な自然環境が減少しているから」35%などであった。生活スタイルや生活環境の変化の影響を受けていることがうかがえる。

#### Q6 自然遊びを最も多く体験した時期

図2に、年度別学年別に、自然体験を多くした時期の度数を示す。

この結果から、いずれの年度においても自然体験を最も多く経験したのは小学生の時期であり、中学生になると急激に低下し、その傾向が大学生の時期まで続いていることがわかる。この傾向は本学科の学生に固有のものとは思われない。このことに関連して全国規模の調査を調べてみると、たとえば、内閣府の調査報告の子ども・若者白書<sup>33)</sup>では、自然体験活動について、学校以外の公的機関や民間団体が行う自然体験活動への小学生の参加

率は、どの学年でもおおむね低下しており、特に小学校4～6年生は6年間で10%ポイント以上低下していることが明らかにされている。また、国立青少年教育振興機構が行った調査「子どもの体験活動の実態に関する調査研究報告書—子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する—」<sup>34)</sup>では、年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきていることが報告されている。これらの調査結果で示された自然体験を含む体験の減少傾向は全国規模で続いていると思われる。

#### Q7 自然遊びをしにくくなっている原因

上述のように、小学校の時期をピークとして自然体験が減少するのはどのような事情があるだろうか。また、この現象の理由を学生はどのようにとらえているのだろうか。図3に、理由として選択した項目の割合を示す。

最も割合が高いのは「②スマホなど室内での遊びのほうが楽しいから」65.7%で、「①身近な自然環境が減少しているから」38.1%、「⑧忙しくて時間を確保する余裕がなくなっているから」34.3%、「⑤からだを動かしたりするのが面倒になっているから」28.4%、「⑥自然遊びを一緒にする仲間が少ないから」27.6%と続く。②はQ4の「屋内遊びが好き」の大きな理由であろう。①と⑧は大きくは外的要因であり、①は自然環境の変化、⑧は社会環

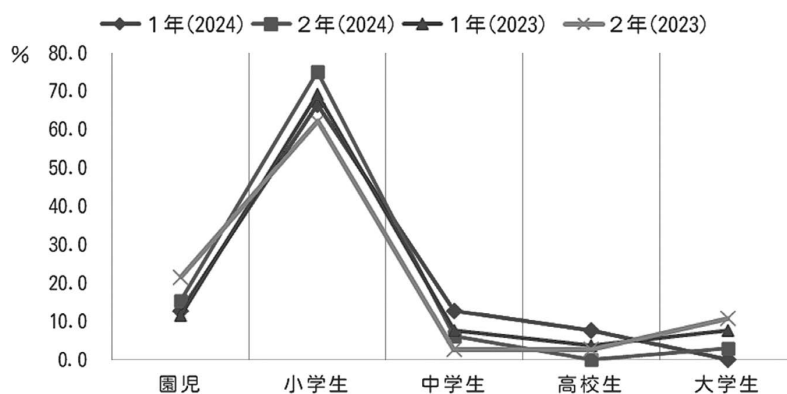


図2 体験の割合（年度別学年別）

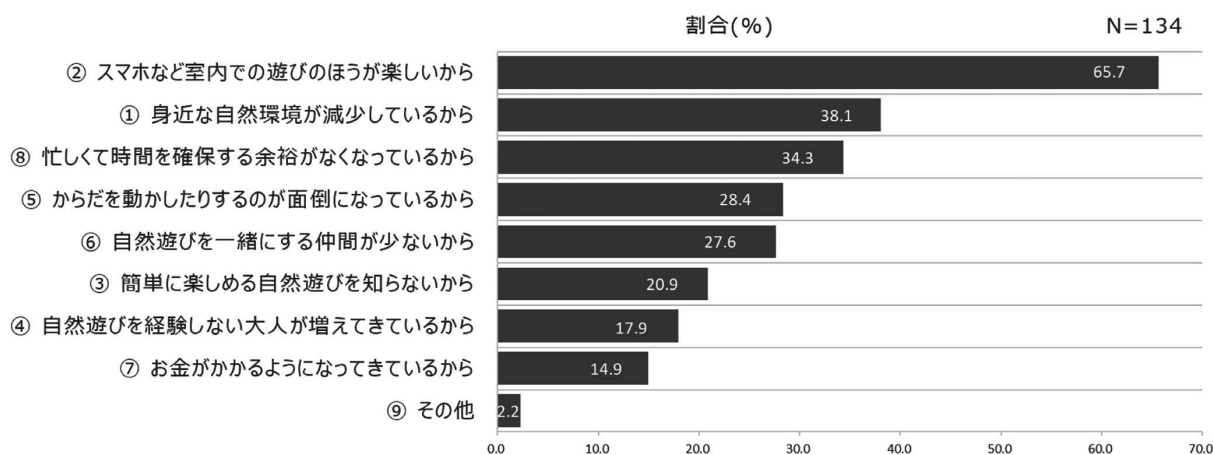


図3 自然遊びをしにくくなっている理由



境の変化とみることができる。一般的に、小学校、中学校、高校と学校段階が進むにつれて自由に使える時間が減少する傾向にあり、インドアの遊びに比べてアウトドアの遊びは時間がかかることから「③簡単に楽しめる自然遊びを知らないから」にも関係していると思われる。「⑤からだを動かしたりするのが面倒になっているから」について学年別にみると、2023年度2年生は21.6%、2023年度1年生は15.4%、2024年度1年生は30%であり、コロナ禍を経て入学してきた影響もあるようにも思われるが単純な増減傾向ではないため、他の要因があると考えられる。学生が自然遊びをしにくくなっている原因のとらえについて、さらに詳しくみるためにQ4で屋内遊び・屋外遊びを選んだ者とのクロス集計を行った(表8)。

屋内遊びが好きと回答した者では、「②スマホなど室内での遊びのほうが好きだから」が最も多く、「⑧忙しくて時間を確保する余裕がなくなっているから」、「⑤からだを動かしたりするのが面倒になっているから」、「⑥自然遊びを一緒にする仲間が少ないから」の順に続く。一方、屋外遊びが好きと回答した者では、同じく「②スマホなど室内での遊びのほうが好きだから」が最も多いが、次に「①身近な自然環境が減少しているから」、「⑧忙しくて時間を確保する余裕がなくなっているから」となり、違いが表れている。⑧、⑤、⑥については、屋外遊びを阻害するネガティブな要因として解釈することができる。

#### Q8 幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことのメリット

幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことについて学生はどのようなメリットを感じているのだろうか。アンケート結果(図4)を基に考察する。

「①運動能力・体力・健康の増進につながる」83.6%が最も高く、「③自然や生命を大切にできる心が育まれる」72.4%、「②自然・環境問題に関心を持ちやすくなる」64.2%と続く。①に関しては、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として「健康な心と体」が示されており、学生の意識も高いものと思われる。また、河合<sup>15)</sup>が述べた5つ目の「場」に相当し、従前から自然との関わりで論じられてきたテーマで必須のものと受け止めている。また、清水<sup>35)</sup>は、自然遊びに関して、健康の獲得という観点から自分の身体の知覚を取りあげていることを付記しておく。

②に関しては、幼稚園指導要領や保育所保育指針にも、自然や生命を大切にできる心を育むことが目標として示されており、学生の自覚も高いと思われる。

Q8は自然の中で遊ぶことの価値づけであるといえる。そこで、学生がアンケートの項目間にどのような関係性をもって価値づけをしているかをみるために、選択項目間の相関係数を調べた。対象は特徴をよく把握するため、自然について最も関心が高かった2024年度1年生(肯定的回答100%の集団)とした。表9がQ8の相関分析の結果である。

表8 屋内・屋外遊びと自然遊びをしにくくなっている理由

N=134

	自然遊びをしにくくなっている原因(度数)								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
屋内遊びが好き	17	42	9	10	18	16	6	20	2
屋外遊びが好き	28	37	17	12	17	18	10	21	1
どちらともいえない	6	9	2	2	3	3	4	5	0
合計	51	88	28	24	38	37	20	46	3

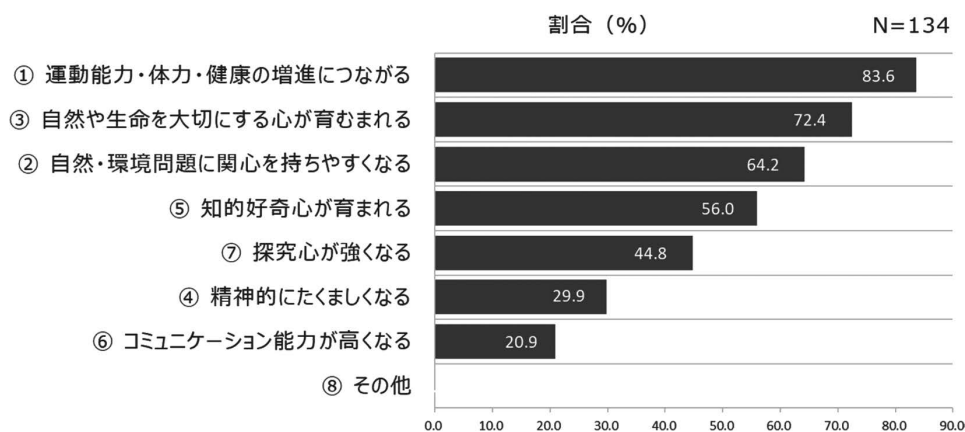


図4 幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことのメリット



p 値が0.01より小さく、正の相関がみられるものは、「⑥コミュニケーション能力が高くなる」と「⑦探究心が強くなる」で0.623であり、「④精神的にたくましくなる」に対して「⑦探究心が強くなる」0.598、「⑥コミュニケーション能力が高くなる」0.468であった。「②自然・環境問題に関心を持ちやすくなる」に対して、「⑦探究心が強くなる」0.442などであった。「探究心が強くなる」が共通していることから、探究心を中心に考えると、コミュニケーション能力や精神力といった非認知能力、レジリエンスの向上とかかわりをもって捉えられているといえる。興味深いことは、この集団における選択度数の割合(%)は、①73.3、②60.0、③70.0、④26.7、⑤53.3、⑥20.0、⑦40.0となっており、選択度数の割合(%)が低い④や⑥などが「探究心」という非認知能力との関係性においてつながりが顕在化されることである。学生は「探究心」という独立した概念だけで価値づけを行っているのではないと推測される。反対に、「①運動能力・体力・健康の増進につながる」は選択度数の割合が73.3%と最も高いものの、他との関連(相関)は高くなく、単独の要素としてとらえられている傾向にあり、これも1つの特徴であるといえる。

**Q9** 幼児期の子どもにとって、自然の中で遊ぶことはどのくらい重要か

この設問については、無回答の2人を除いて全員が肯定的な回答であった。内訳は「とても重要」78.4%、「どちらかといえば重要」20.1%で、その重要性がよく認識されている。

**Q10** 子育てをする場合、子どもと自然の中で過ごす機会の頻度はどの程度か

この設問は前述の保護者とかかわりの延長線上にあり、学生が保護者となった場合を想定し、現実的な視点で子どもが自然の中で過ごすことについて検討するものである。無回答の2人を除いて肯定的回答が97.7%であった。内訳は「できるだけ多く持ちたいと思う」62.1%、「休日であれば持ちたいと思う」37.1%、「できればあまり持ちたくない」0.76%であった。Q9で、「幼児期の子どもにとって、自然の中で遊ぶことはどのくらい重要か」に対する回答に比べると、「とても重要」78.4%と感じているものの、「できるだけ多く持ちたいと思う」61.2%のように、実情としては難しさを感じていることがうかがえる。このことをさらに詳しく調べるために、Q7の「自然遊びをしにくくしている原因」とのクロス集計を行った(表10)。

Q10で「できるだけ多く持ちたいと思う」と回答した者では、自然遊びをしにくくしている原因として「身近な自然の減少」38が最も多く、回答のうち34.2%を占める。「休日であれば持ちたい」と回答した者では、「忙しくて時間確保が困難」17が最も多く、回答の30.9%を占めている。

全年度数でみると、「身近な自然の減少」51(全回答数に占める割合30.2%)が最も多く、次いで「忙しくて時間確保が困難」46(全回答数に占める割合27.2%)で、これらが大きな阻害要因となっていることがうかがえる。

表9 自然の中で遊ぶことのメリットの項目間相関分析結果

N = 39

	Q8 ①	Q8 ②	Q8 ③	Q8 ④	Q8 ⑤	Q8 ⑥
Q8 ①	1					
Q8 ②	-0.02928	1				
Q8 ③	0.37524 *	-0.19461	1			
Q8 ④	0.34330 *	0.35026 *	0.36806 *	1		
Q8 ⑤	0.40925 **	0.13653	0.34590 *	0.40693 *	1	
Q8 ⑥	0.15556	0.40988 **	0.18226	0.46814 **	0.20938	1
Q8 ⑦	0.23602	0.44223 **	0.39777 *	0.59812 **	0.20755	0.62309 **

\*\*p<.01, \*p<.05, +p<.10

表10 子どもと過ごす時間と自然遊びがしにくい原因のクロス集計(度数)

	自然遊びをしにくくしている原因				
	身近な環境の減少	簡単な遊びを知らない	未経験の大人の増加	お金がかかる	忙しくて時間確保が困難
できるだけ多く持ちたい	38	17	16	11	29
休日であれば持ちたい	12	10	7	9	17
できればあまり持ちたくない	0	0	0	0	0
無回答	1	1	1	0	0
合計度数	51	28	24	20	46

## (2) 子どもの自然体験への保護者のかかわり

ここ数年コロナ禍の影響で自然遊びや自然体験の機会が制限される状況が続いてきた。コロナ禍は保護者や家庭等においても大きな影響を及ぼし、体験活動の意義を再考する機会となった。このような状況を踏まえて、幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことについてさらに視野を広げて検討を加えておきたい。

コロナ禍の影響についての報告は多く、たとえば石川ら<sup>36)</sup>は、都市公園への来園頻度やコロナ禍での余暇時間について調査し、フィンランドとの比較を通して、自然とのつながりについて論じ、保護者の労働環境の影響についても指摘している。自然遊びについて保護者や家庭の関係を調査したものに、森の学校（特定非営利活動法人）の報告書<sup>37)</sup>があり、様々なデータが掲載されている。これを参考に、幼児期の子どもが自然の中で遊ぶことに対する保護者の意識や願い等を把握し、本学科の学生の意識との関係を見る。

この報告書では保護者が子どもに求めることについて、1位の項目を3点、2位の項目を2点、3位の項目を1点とし、各項目間の点数を比較している。その結果総合点が最も高かったのは「好奇心・探求心」で、次に「自然とのふれあい」、「感性・感受性を高める」の順で高かった。本学科の学生のアンケート調査結果では、知的好奇心は第4位、探究心（報告書では探求心）が第5位であり、保護者が望むことと乖離があることに留意したい。

さらに、報告書では、1番下の子どもが未就学児、小学校低学年、小学校高学年の3つにわけて、子どもに求めることの1位の項目を年齢ごとに調べた結果が示されており、「自然とのふれあい」、「創造力」は小さな子どもを持つ親ほどその割合が高く、また、反対に「自立心」は小学校高学年の子どもをもつ親の割合が最も高くなっている。本学科の学生関係が深い未就学児に関してみると、最も高いものが「自然とのふれあい」42.1%で、次に「好奇心・探求心」21.6%となっている。これらはまさに、幼稚園指導要領の領域「環境」で述べられている「周囲の様々な環境に対して、好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」に相当するものあり、保護者との関係からも幼稚園指導要領の目標の理解・認識をより一層深める必要がある。

森の学校の報告書<sup>37)</sup>では、65.8%の親は、子どもとの自然体験において何かしら困りごとを抱えており、なかでも「自然の中での遊び方が分からない」親が多いことが示されている。また、親子の自然遊びの頻度は、「月に1～3日」が約44%で最も多く、次いで「ほぼ自然遊びをしていない」が約36%、合わせると約80%の親子が自然遊びは月に1～3日以下であるとしている。さらに、今後の親子の自然遊びの頻度については、約92%が増やしたいと考えていると述べられている。この報告書はコ

ロナ禍での親子の自然体験や自然遊びについて調べたものであり、自然遊びの頻度はいくらか改善されていると考えられるが、「自然の中での遊び方が分からない」についてはコロナ禍によって顕在化したもので、今日においても状況はあまり変わらないのではないと思われる。

子どもの自然体験に保護者がかかわることについて、たとえば、人見ら<sup>38)</sup>、山本<sup>39)</sup>や前田<sup>40)</sup>の報告がある。人見らは自然遊びの経験に関して、自然遊びの「親経験率」と「子ども経験率」という尺度を考え、「親経験率と子ども経験率の両方が高かった自然遊びは、現代においても親子一緒に経験されることが多いが、親経験率は高いものの子ども経験率の低い自然遊びは、親子で経験しにくくなっている遊びということが出来る」と述べ、子ども経験率が低くなる理由としてその自然遊びを親子で一緒に経験していないことを挙げ、親子一緒にでの経験の有効性について言及している。山本は親の養育態度に着目し、子どもの自然体験に対する親の関心と子どもの社会教育の参加に関連があることや社会性の相関を見出している。また、子どもの生物に対する好き嫌いの感情の成立には父母の影響があることを示唆している。高橋<sup>20)</sup>らは、単に親子の関係にとどまらず、「幼少期に自然との関わりの中で、夢中になったり感動したりした体験があれば、親になった時に、同様の体験を我が子にさせたいと思う傾向がみられる。このような望ましい世代間の連鎖を生むことは有用であり、今後の課題である」と世代間の連鎖という視点からかかわりの意義を述べている。さらに、以前のような時間・空間・仲間の三間（さんま）が減少していることに関連して、家庭教育を補完するために教育行政が果たす役割として「親子で自然との関わりを楽しめる環境を整備すること」を指摘している。

保護者が子どもの自然体験にかかわることは様々な場面で推奨されているが、かかわり方について、清水<sup>41)</sup>は「大人の関わりを最小限に抑えた、『子どもと自然の』時間と空間であり、そこに『自然を遊ぶ』『自然と遊ぶ』といった自立的行動の芽生えをみてとることができた。そして、それを支えるのは、大人が意図的に『日常の思惑』を最小限に抑え、遊びとしての『自然の』時間と空間を保障することにある」と述べており、重要な指摘であると受け止める。

## (3) 本学科学生に対するアンケート調査結果のまとめ

アンケート調査結果から読み取れる内容をおおまかに整理すると以下ようになる。内容を簡潔に表すために、割合（%）などの数量を表す数値は省略した。

- ①学生の多くは自然が好きだが、理科が好きな学生は半数に満たない。
- ②森、海など自然の豊かな場所に出かける目的の多くは美しい自然を楽しむため、ドライブを楽しむためとする学生も多い。

- ③自然遊びを含め、自然体験は重要であると広く認識されている。
- ④自然に対するイメージは「忌避傾向」と「感受傾向」の2軸でとらえることができる。
- ⑤屋内遊びを好む学生及び屋内遊びをする学生の割合は学年が進むと高くなる傾向がある。
- ⑥自然体験活動は小学生の時期にピークがあり、その後急激に低くなる<sup>42)</sup>。
- ⑦自然体験が減少している理由として、屋内遊びが好きと回答した学生では、「スマホなど室内での遊びのほうが好き」が最も多い。屋外遊びが好きと回答した学生では、「身近な自然環境が減少しているから」が最も多い。自然体験活動は小学生の時期にピークがあり、その後減少する要因については、「忙しくて時間を確保する余裕がなくなっている」ことが考えられる。
- ⑧すべての学生が、幼児期の子どもにとって自然の中で遊ぶことは重要であると考えており、自然遊びの重要性は学生によく認識されている。
- ⑨学生が幼児期の子どもが自然の中で遊ぶメリットとして考える第1位は「運動能力・体力・健康の増進につながる」であるが、保護者が子どもに望むことの第1位は「好奇心・探求心」の育成であり（学生では第4位）、両者の意識に乖離がみられる。
- ⑩子育てをする場合、ほとんどの学生が子どもと自然の中で過ごす機会を多く持ちたいと考えている。自然遊びがしにくくなっている原因として、「できるだけ多く持ちたいと思う」と回答した者では、「身近な自然の減少」が最も多く、「休日であれば持ちたい」と回答した者では、「忙しくて時間確保が困難」とした者が最も多い。

## 5. 課題と課題解決のための方向性

自然体験の減少に関する報告書をもとに、自然体験減少の傾向や実態について把握するとともに、本保育学科学生へのアンケート調査によって自然体験や自然遊びに対する意識等について分析した。これらを通して得られた知見をもとに、自然体験や自然遊びを実施するうえでの課題について整理し、その解決に向けて検討する。

### (1) 保育者養成機関の課題

保育者養成機関において、自然体験活動を展開する際の課題について永井<sup>30)</sup>の指摘を前述した。そのほかにも次のような課題がある。

- ①指導者や指導環境に関して
  - ・自然体験活動を指導するための専門的な知識・技術を持った指導者の数が十分でないこと<sup>43)</sup>
  - ・保育者自身が自然に触れる機会が少ないことによる経験が不足していること
  - ・自然体験活動を実施するための施設や設備が十分に

整っていないこと

- ・自然体験活動の教育効果は多様重層的なため評価が適切に行われない恐れがあること

### ②教育課程等に関して

- ・自然体験活動は屋外で行われるため、移動等を含め相当の時間を必要とするが資格取得等の必要性から、カリキュラムに時間を確保する余裕がないこと
- ・自然体験活動は天候に左右される面が大きいので、カリキュラム・シラバス・時間割等において柔軟性が求められること
- ・1クラスの人数が多い場合、実習体験等において指導の限界があること

### ③指導内容に関して

- ・内容が多岐に渡るため、体験に充てる時間の確保が難しいこと
- ・小動物などの生き物を飼育することが難しく、指導に制限がかかること
- ・危険予知等に関する指導を取りあげたテキストが少ないこと

### ④学生に関して

- ・ライフスタイルの変化や生活環境の変化により、学生の自然体験が不足していること
- ・清潔志向の高まりから泥や動物を敬遠する傾向があること<sup>44)</sup>
- ・地域の文化や自然体験といった地域とのかかわりが少ないこと<sup>45)</sup>

## (2) 環境にかかわる課題

自然体験活動は保育者養成機関の学修だけで完結するわけではなく、子どもが幼児期を過ごす園や成長に伴って在籍する教育機関にも引き継がれていくものである。

園については、秋田<sup>46)</sup>が園庭の重要性に鑑み、「園庭環境多様性指標」という独自の指標を作成し、全国の保育・幼児教育施設等に対して園庭環境について調査を行っている。園庭が面積基準にだけで議論してきたことに課題を投げかけ、幼児の経験の質的な保証という観点をもとに、アウトリーチを行うことの重要性を強調している。

園庭以外で子どもがよく遊ぶのは公園であろう。吉野<sup>47)</sup>は、遊びと遊び場の関係を調査している。家から遊び場までの時間で最も多いのが5分以内37%で、次いで5～10分以内17%で、30分以上は10%と少ない。森の学校の報告書（前述）によると、自然体験のノウハウを身につけたい場所について、最も希望が多かったのは「（自宅から）多少離れた自然体験がしやすい場所」（自然に親しむタイプの都市公園など）で、「身近な場所」と「自然豊かな場所」では大きな差はなかった。公園などを場所とする場合の課題<sup>48)</sup>は、ロケーションだけでなく、環境の多様性の担保、安全の確保、自然遊びの指導者の確保



などがある。

### (3) 課題解決に向けての検討

上記の課題は多岐・多様であり、養成機関や家庭等の自助努力で解決することが難しく、行政の支援が必要なものもある。これらの課題について解決の方向性を探る。

①指導者や指導環境に関して、木村ら<sup>49)</sup>は、次のように述べ、人材育成の必要性を説いている。

「多くの幼稚園教員や保育士が、自然科学に関する遊びや活動に対して困難を抱えており、幼児期の科学教育を担う人材の育成が喫緊の課題である。このような状況が生じている背景には、我が国の保育者の大半がいわゆる文系コースの出身であることが影響していると考えられる。(中略)しかし、現在すでに多くの保育者が自然科学に関する遊びや活動に対して困難を抱えているという状況においては、根本的な解決方法ではなく、直近の保育者養成や現職保育者を対象とした人材育成の機会に、この課題に向き合っていくことが必要である」。木村らは、一般に、理系科目とみなされている数学や理科に対する苦手意識によって文系を選択している割合が高く、「消極的文系」という表現によって問題点を指摘している。保育者自身が自然に触れる機会を自ら創出し、自然へのかかわり方を学ぶとともに、自らのセンス・オブ・ワンダーを醸成していくことが不可欠であろう。しかし、ライフスタイルや生活環境の変化に抗うことは困難であり、それを補完する方策の検討が必要である。指導環境に関して、たとえば小動物を飼育しながら学ぶことは大きな意義をもつが、環境を整え、維持することは物理的・人的にも困難になりつつある。そのような中、ビオトープをつくることは実現の可能性が高い方策であろう。また、地域の協力を仰ぐことも現実的な選択肢の1つとなる。実際に、昆虫や魚等を育てている地域住民から毎年提供を受けている例もある。地域社会や家族との連携や参画が可能であれば継続性が見込める。

②教育課程等に関して、資格取得のために定められた科目を履修・修得する必要があるため、大学が設定する科目の精選を図るとともに、必修科目を最小限に抑えるなどの工夫によって郊外実習等が行えるような時間を創出する。あるいは野外実習などを夏季集中講義として開講するなどの方法も考えられる。また、自然遊び等に関する学修を教育実習や保育実習等と連動させることによって、知識や経験を実際の指導の場で生かせるようにすることも有効であろう。そのためには実習時期から逆算して指導項目を再配列するなど工夫したシラバスを作成する。評価方法に関しては、体験量の多少をとらえるのではなく、質的な評価のウエイトを高くする。たとえば、幼児の気づき、驚き、発見、コミュニケーションなどの相互作用をとらえるようにする。その際、動画記録など ICT 機器を活用したり、ドキュメンテーションを作

成したりすることでグループリフレクションも可能となり、評価の広がりや深まりが期待できる。保護者が望む「好奇心・探求心」の育ちをみとめるためには、プロセス評価を重視し、子どもと自然のかかわりを動的にとらえようとするのが評価の基本となる。場合によっては、プロトコルの記録が必要になるが、日常的にこれを行うのは無理がある。たとえば、ICT 機器を活用して、音声データを文字変換し、テキストマイニング、共起分析、クラスター分析などを行うことでより多様な観点からの評価が可能となるであろう。

③指導内容に関して、学習事項の知識を体験と結びつけるようセットで扱うようにする。そのために表記を工夫する。たとえば、ある知識があれば、その体験や活用方法を、[知識].体験、[知識].活用などのように1つのまとまりとして表記し、知識と体験の往還を常に意識するようにし、学習時期や時間のズレやギャップを最小限にすることが考えられる。小動物の飼育は物理的な制約があり解決は容易ではない。これに関しては後述する(地域の協力)。危険予知については非常に重要な事柄であり、知識を得るだけでなく、危険予知能力を身に付けることが求められる。そのためには様々な場面において、想像力を働かせることが必要であり、KYT (たとえば日本シェアリングネイチャー協会の危険予知トレーニング)などを使用することが考えられる。毎年、領域「環境」の授業でKYTを行っており、学生からは危険予知に対する知識や危険予知の力が身に付いたと好評である。

④学生に関して、多くの報告にみられるように社会の変化に伴って学生のライフスタイル、生活文化が変容しており、今回のアンケート調査からもわかるように学生の自然体験の減少は否めない。これを補うために上述のような教育課程・教育内容の創意工夫が必要である。吉田ら<sup>50)</sup>は屋外での遊びの自然体験が乏しい教員にとって参考となるものとして、実際に日本のさまざまな地域で行われてきた昔ながらの遊びを挙げている。そのほか、養成機関だけの取組とせず、保育現場や地域との連携によって、経験の機会の確保や実践性を高めることが考えられる。保育現場との連携に関しては、岡<sup>51)</sup>の実践報告が参考になる。岡は教育において自然・生活体験活動をデザインする場合、そのフィールドは対象者が居住する地域的空間となるとし、保育現場と保育者養成校の連携による幼児への自然体験プログラムの地域実践事例の報告を通して、自然体験プログラムの地域実践の可能性を示唆している。地域とのかかわりに関して、草光ら<sup>52)</sup>は、子ども時代の自然の中での遊びが地域社会への関心や愛着を高めることにもつながることを指摘している。

⑤その他、保護者の困りごととして「自然の中での遊び方が分からない」ことがある。人見らは、子どもの自然遊びへの保護者のかかわりの重要性を指摘しており、



保護者に対する何らかのサポートが求められる。本学科の学生へのアンケート調査においても、自然遊びをしにくくなっている理由に、自然遊びを経験しない大人の増加や簡単に楽しめる自然遊びを知らないことなどを挙げている学生も一定数いる。このことの対応策として、ネイチャーゲームが挙げられる。ネイチャーゲームは、見る・聞く・触る・嗅ぐなどの五感を使って自然とふれあい、自然の美しさ等にきづき、自然への親しみを感じることができる活動で、現在170種類以上の遊び方が紹介されている。

ネイチャーゲームには、次のような特色がある。

- ・知識や年齢に関係なくできる
- ・身近な公園や学校、室内でも気軽にできる
- ・さまざまな感覚を使って自然を直接体験できる
- ・大人と子どもが一緒にできる
- ・参加者の心と体の状態にあわせた展開ができる

近年、幼稚園、小学校や中学校等でネイチャーゲームを取り入るところが増えており、本保育学科においても、そのいくつかのプログラムを「環境領域指導法」の授業等に取り入れている。これまで多くの実践例<sup>53)</sup>が報告されており、また関連書籍等<sup>54)</sup>も多いので活用しやすい環境が整ってきているといえる。

## 6. お わ り に

領域「環境」の科目を担当し、講義の多くの場面で幼児の自然遊びや自然体験について取り上げてきた。その中で近年の学生の自然体験不足を幾度となく感じてきた。これは保育者養成機関の学生という特質にかかわるものなのか、あるいは幅広く一般的な状況なのか疑問に感じ、文献調査や本学科の学生にアンケート調査を行い、比較検討などを行うことで、より広い視座から自然遊びや自然体験について考察することにした。文献調査からは、予想していたよりも相当以前から自然体験離れが進んでおり、これは日本だけに限らず世界的な傾向であることがわかった（たとえば、A global synthesis of trends in human experience of nature）。さらに、親世代においても自然遊びの経験不足が少なくなく、親自体が遊び方を知らないという状況があることもわかった。この傾向は世代を越えて連鎖し、ますます拍車がかかることが危惧される。こういった状況から養成機関が果たすべき役割も大きいといえる。

しかし、社会構造の複雑化や価値観やライフスタイルの多様化が進み、経験格差も顕在化している現在、それに応じた形で学修を創造的に構成していく必要がある。本学科の学生の実態と照らし合わせながら、育ちの射程を長く定め、自然とかわり、自然がもつ多様性や奥深さに触れ、不思議さや面白さを味わえるよう創意工夫を生かすことが求められる。そのための方法について検討した事柄を今後の授業で具現化するとともに、適切な評

価方法を考案し、検証を重ねながら改良を加えていきたい。さらに、学修が教室の中だけにとどまらないよう、カリキュラム検討を行うとともに、地域や外部機関との連携についても取り組んでいきたい。

## 引用文献・注釈

- 1) 「体験活動」の定義・範囲について、中央教育審議会答申「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（平成19年）では、主として「体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験する者に対して意図的・計画的に提供される体験」としている。中央教育審議会答申「今後の青少年の体験活動の推進について」（平成25年）において、「体験活動」は、その内容に応じて「生活・文化体験活動」「自然体験活動」「社会体験活動」に分類されており、本稿ではそのうちの「自然体験活動」を対象としている。
- 2) 文部科学省（令和3年）、令和2年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告～21世紀出生児縦断調査を活用した体験活動の効果等分析結果について～、19。自尊感情の向上：自然体験を多く経験した子どもは、自分に対する肯定的な感情が高まりやすい。社会性の発達：異年齢の子どもたちと自然の中で遊ぶことで、コミュニケーション能力や協力する力が育まれる。精神的な回復力の向上：自然体験を通じて、ストレスに対する耐性や新しいことに挑戦する意欲が高まることが示されている。
- 3) 山本俊光（2018）、幼少期に自然体験を頻繁に体験した若者の社会性、日本環境教育学会、環境教育、28-1、2-11。幼少期に自然体験を頻繁に行った若者が、社会性においてどのような影響を受けるかを調査し、自然体験が多いほど、共感や社会的スキルが高まることが示されている。
- 4) 中川保敬・草野柊・井福裕俊・小澤雄二・齋藤和也・坂本将基（2019）、自然体験活動が子どもに与える有効性について～社会教育施設で行われる継続した体験活動を通して～、熊本大学教育実践研究、36、191-195。継続的な自然体験活動が子どもたちの「生きる力」に与える影響を調査し、とりわけ、心理的社会的能力や身体的能力の向上が確認された。
- 5) 福富優・平野吉直・中野友博（2020）、幼児キャンプの効果に関する研究——幼児用自然体験活動効果測定尺度の作成とその試用一、野外教育研究、1-14。幼児キャンプの効果を測定するための尺度を開発し、幼児を対象としたキャンプ活動が、子どもたちの心理的社会的能力や身体的能力に与える影響を調査し、キャンプ活動がこれらの能力を向上させることが明らかにされた。
- 6) 増田啓子（2022）、子どもの育ちにおける自然・生活体験の蓄積と社会的スキルの育成、常葉大学保育学部紀要、8、1-9。自然体験が子どものチームワーク力、ユーモアのセンス、問題解決能力に与える影響を調査し、自然体験がこれらのスキルを高めることを報告している。
- 7) 杉村伸一郎・山崎晃・財満由美子・林よし恵・松本信吾・三宅瑞穂・菅田直江・落合さゆり（2007）、幼児期における自然体験の効果に関する実証的研究、広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要、35、251-260。教育実習生から見た幼児期の自然体験の効果を調査し、自然体験が子どもの社会性や学習意欲に与える良好な影響があったことが報告されている。
- 8) 国立青少年教育振興機構・国立オリンピック記念青少年総

- 合センター（2006）、青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書、平成10年と17年の比較。
- 9) 独立行政法人国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター（2024）、青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）～減少する体験活動、放課後や休日の過ごし方の実際～。青少年は、保護者や自身が希望するほどの体験ができていないこと、自然体験について、2010年代を通じて、子どもの自然体験にやや減少傾向がみられ、コロナ禍を経た令和4年にはさらに減少していることなどが報告されている。
  - 10) 曾我昌史・今井葉子・土屋一彬（2016）、「経験の消失」時代における自然環境保全 人と自然との関係を問い直す、wildlife forum 野生生物 井戸端会議, 20, 24-27。「経験の消失」はコミュニティや世代を跨いで伝搬する危険があり、この負の連鎖こそが経験の消失を考えるうえで最も注意しなければならない点であると述べている。
  - 11) 菅沼敬介・野田敦敬（2020）、子どもを取り巻く「自然遊び」に関する調査研究、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 5, 174-175。子ども世代の自然遊び時間の減少を、「時間の減少」「空間の減少」「仲間の減少」という3つの視点から論じている。
  - 12) 独立行政法人国立青少年教育振興機構国立オリンピック記念青少年総合センター（平成18年）、「青少年の自然体験活動等に関する実態調査」報告書平成17年度調査。小学1年生と6年生について、3年間でいずれも夏休みに青少年が家族や友達などと一緒に自然体験活動に参加する機会が減少していることが報告されている。
  - 13) 文部科学省（平成19年）、次代を担う自立した青少年の育成に向けてー青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策についてー。近年、青少年がスポーツや外遊び等の体を動かす時間が減ってきており、自由時間の大半は自分の家や友達の家など屋内にいる。しかも、たとえ周囲に友達がいても各々が別々に一人遊びをしており、このことは戸外にいても同様であると報告している。
  - 14) 菅野幸恵（2024）、クーヨン, 7, クレヨンハウス, 29-31。「自然の中で不便なことだらけですが、サービスを提供されて、それを消費するだけの生活では、子どもの自発性は育ちません」と自然とかわるものの不便さを肯定的に捉えている。
  - 15) 河合雅雄（1995）、ひとはなぜ自然を求めるのか、三田出版会, 63。
  - 16) 曾我昌史・今井葉子・土屋一彬（2016）、前掲書10), 25。
  - 17) 岡本理子（2010）、幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察 一秋田・森の保育園の実例から一、桜美林論考。自然科学・総合科学研究, 1, 39-48。持続可能な社会の構築に向けたライフスタイルの転換には、幼児期の自然体験によって形成された価値観が基盤になることについて、秋田の「森の保育園」の事例を通して検証している。
  - 18) 文部科学省、幼稚園教育要領（平成29年告示）、フレーベル館, 14-15。
  - 19) 厚生労働省、保育所保育指針（平成29年告示）、フレーベル館。幼稚園教育要領や保育所保育指針で用いられている「環境」の語は、自然との関わりだけでなく広範な環境との関わりを意味していること注意を要する。初期の幼稚園教育要領では、「自然」という領域が存在し、自然観察や自然との関わりが重視されていたが、1989年の改訂において「自然」という領域が「環境」に統合された。これは、都市化や生活様式の変化により、子どもたちが自然と触れ合う機会が減少していることの指摘を受け、自然環境だけでなく、広範な環境との関わりを重視する必要性があったためとされている。
  - 20) 高橋多美子・高橋俊之（2007）、幼少期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義、理科教育学研究, 48-1, 57-58。視覚、触覚、嗅覚などの五感の働きぬきに感性を扱うことはできないため、感性の陶冶には五感の発達を促すことが必要であり、この論文で述べられている原体験とはそのことを指していると解釈できる。
  - 21) 菅野幸恵（2024）、前掲書14), 29。
  - 22) 河合雅雄（1995）、前掲書15), 62-64。河合が示している「自然に対して謙虚な心が芽生える場」は、自然への畏敬の念を覚える機会と解釈してよいであろう。
  - 23) 文部科学省（令和3年）、青少年の体験活動の推進に関する調査研究～発達段階に応じた望ましい体験の在り方に関する調査研究～。
  - 24) 村上博文・佐野小雪（2018）、遊びにおける自然の魅力ー変化・誘発・創出という観点から一、自然保育学研究, 1-1, 15-24。
  - 25) 金子仁（2015）、自然体験が育む幼児の生きる力の育成ー森の幼稚園での活動を通して学ぶこと一、育英短期大学幼児教育研究所紀要, 13, 23-31。
  - 26) 中川保敬・草野柊・井福裕俊・小澤雄二・斎藤和也・坂本将基（2019）、自然体験活動が子どもに与える有効性についてー社会教育施設で行われる継続した体験活動を通してー、熊本大学教育実践研究, 36, 191-195。継続的な自然体験活動は、「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」のうち、特に「心理的社会的能力」、「身体的能力」の2つを優位に向上させる効果があったことが報告されている。
  - 27) 文部科学省（令和3年）、青少年の体験活動に関する調査研究～21世紀出生児縦断調査を活用した体験活動の効果等分析結果についてー（令和2年）。小学生の頃に自然体験や社会体験、文化的体験を多く経験した子供は、高校生になった時に自尊感情や外向性（自分のことを活発だと思う）も高い傾向がみられ、新しいことに興味を持つ、自分の感情を調整する、将来に対して前向きであるといった精神的な回復力も高くなることが報告されている。
  - 28) 教育再生会議（平成29年）、自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓りひろく子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）、18。
  - 29) 前田正紀（2009）、幼児教育における自然体験と保育者の資質ー保育者養成機関における環境教育の視点から一、仁愛女子短期大学研究紀要, 83-84。領域「環境」の授業内容・方法、指導計画上の位置づけなどについては、環境教育の視点を明確に踏まえた改善を加える必要があり、特に自然体験学習を重視する方向性を打ち出していく必要を指摘している。
  - 30) 永井毅・溝邊和成（2019）、子どもの自然遊びを豊かにする保育実習前授業の改善ー保育にかかわる「虫」を題材とした演習授業に見る学生の意識変化一、保育学研究, 57-1。
  - 31) 国立若狭湾青少年自然の家、若狭の海湖山から「体験の風をおこそう」運動推進実行委員会（令和元年）、「自然体験活動等に関するアンケート」、65-67。
  - 32) 最も「関心がある」の割合の差が大きいものは、2023年度



- 1年生と2024年度1年生であり、U検定の結果 $p=.127$ となり有意差は認められなかった。2023年度1年生と2024年度2年生は同一集団であるが、調査時欠席者等があったため、ウィルコクソン順位検定を用いずにU検定によったが、同様に有意さは認められなかった( $p=.277$ )。
- 33) 内閣府(平成26年), 子ども・若者白書, 1-3, 29。
- 34) 国立青少年教育振興機構(平成22年), 「子どもの体験活動の実態に関する調査研究—子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する—」, 6。
- 35) 清水一巳(2022), 子どもの主体的な健康の獲得に関する研究 自然遊びにおける危険回避行動の経験から, 千葉敬愛短期大学紀要, 44, 43。
- 36) 石川萌絵・伊藤晴希・岡本乃愛・佐藤加菜・松下陸斗・森岡真理(2021), 身近な自然との触れ合い機会の創出—フィンランドとの比較によるアプローチから—, ISFJ2021 2021政策フォーラム活動報告書。
- 37) 特定非営利活動法人 森の学校(2022), 新しい生活様式での「親子の自然体験」推進事業, 森の学校と企業ボランティア協働プロジェクト。
- 38) 人見久城・小村紀子(2009), 子どもの自然遊び体験に関する調査, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 32, 226。
- 39) 山本俊光(2012), 幼少期の自然体験と大学生の社会性との関係—親の養育態度をふまえて—, 環境教育, 22-1, 22。
- 40) 前田正紀(2009), 前掲書29), 85。
- 41) 清水一巳(2016), 子どもの自然遊びに関する社会学的研究, 千葉敬愛短期大学紀要, 38, 9。
- 42) 人見久城・小村紀子(2009), 前掲書38), 229。具体的な内容として「生き物を扱うもの, 季節が限定されるもの, 遊ぶまでに手間や時間がかかるもの」などの特徴をもつ自然遊びにおいて経験率低下の傾向がみられたことを報告している。
- 43) 宮下治(2011), 幼児教育における野外自然体験の実態と課題に関する研究—教師や保育士の意識をふまえて—, 理科教育学研究, 52-1。東京都と神奈川県の幼稚園と保育所を対象とした調査で, 「幼稚園の教師や保育所の保育士は自然事象そのものは好きだが, 自然事象を指導することについてはあまり得意とは意識していない実態があることが明らかになった」としている。さらに, 「各養成校においては, 単に自然物を活用した造形作業だけで『保育内容指導法(環境)』の授業が完結することのないように, 実践的な活動を多く取り入れ, 教師や保育士としての指導力を育むカリキュラムに改めていくことが急務である」と指導技術の向上に関して警鐘を鳴らしている。
- 44) 高橋多美子・高橋俊之(2007), 前掲書20), 57。毎日新聞「泥は友達, みな没頭」(8月朝刊2004)を引用し, 環境の変化に伴うものとして子どもの清潔志向を紹介している。
- 45) 井田秀行・青木舞(2006), 教員養成系大学生の身近な自然観とそれに応じた自然教育, 保全生態学研究, 11, 108・111。信州大学教育学部での実践を通して, 日々の暮らしから自然の知識や知恵を得ることが困難になっており, 「生活様式の変化や遊びの多様化もさることながら, 彼らの幼少期に囲まれていた『自然』の大部分が, すでに人々の暮らしとは密接な関わりを持たず, 伝統的な生き物の生育・生息地として機能し難い『自然』であったことがうかがえる」と述べている。
- 46) 秋田喜代美・辻谷真知子・石田佳織・宮田まり子・宮本雄太(2017), 園庭環境の調査検討—園庭研究の動向と園庭環境の多様性の検討—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 55・57・63。
- 47) 吉野美沙樹・古谷勝則・鈴木薫美子(2011), ランドスケープ研究, 74(5), 593。
- 48) 吉田佑・伊藤孝・関友作(2009), 自然観察・自然遊びの場としての公園の利用—「生活科内容研究」自然分野の授業実践を中心として—, 茨城大学教育学部紀要(教育科学), 58, 51。課題以外に, 実際に授業の一環として比較的大人数で, 公園において自然観察もしくは自然遊びを行う利点として次の事項が挙げられている。当たり前のようであるが, 実施に当たって点検を要する事項もある。どこにでもある身近な存在である・トイレが整備されている・車通りから遮断されている・安全を考慮されて設計されていることが多い・駐車場を確保できる。
- 49) 木村優里・高野未羽(2024), 幼稚園教諭志望の大学生の文理選択から職業選択に至るプロセスにおける文系観・理系観の影響, 科学教育研究, 173-174。
- 50) 吉田佑・伊藤孝・関友作(2009), 前掲書46), 60。吉田らは, 昔ながらの遊びについて「これらは物資が必ずしも充分でない時代から受け継がれてきたものであるもので, 必然的に自然の素材を活用する自然遊びである。これらの中から, 公園ごとの特徴に合ったものを選ぶことは極めて有意義であるだろう」と有用性を指摘している。
- 51) 岡健吾(2018), 幼児への自然体験プログラムの実践と展望—保育現場と保育者養成校の連携による地域の実践を例えに—, 札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要, 103・107。岡は「物理的自然環境および生態系への関心に留まることなく, 地域的空間を風土の視点から捉えなおすことによって, 子どもたちは地域に固有の『生活文化』の体験を通して, そこに立ち現れる『自然』や『生活』あるいはそれらの関係について学んでいくことも示唆できよう」と述べ, 「この意味から『教育』の中に子どもの『生活文化』としての『地域』を捉えなおすことの意味がうきほりになるう」としている。
- 52) 草光紀子・上田哲子(2022), 子ども時代の自然の中での遊び経験が成人後の自然への親和性や地域社会への関心・愛着に及ぼす影響, 石川県立大学研究紀要, 35。
- 53) 吉田佑・伊藤孝・関友作(2009), 前掲書46), 60。ネイチャーゲームは, 非常に多岐にわたりさまざまな選択が可能なゲームであること, ゲームの紹介指導書が書籍等として広く公開されており情報入手が容易であること, 指導者養成を目的とした研修会が定期的の実施されており経験者から実地を通して指導を受ける機会が多数準備されていることなどスキルアップのための活用の有用性について述べられている。
- 54) 長野県教育委員会, 自然教育・野外推進会議(令和5年), 自然教育・野外教育 アクティビティとプログラム集。6つのねらい「感性を豊かにする, 探究心を育てる, 自己肯定感を育む, 協調性を高める, コミュニケーション能力を高める, 信頼関係をつくる」に基づき, それぞれ16, 9, 7, 5, 4, 2種類のアクティビティが掲載されている。ダウンロードして使用することができるので便利である。

## 参 考 文 献

- ・ Victor Cazalis・Michel Loreau・Gladys Barragan-Jason (2022), A global synthesis of trends in human experience of nature, Ecology and the Environment published by Wiley Periodicals LLC on behalf of The Ecological Society of America
- ※自然体験 (Experience of Nature, EoN) の世界的な傾向を系統立てて検討・分析し、特に、北米、西ヨーロッパ、日本における自然体験の減少傾向が報告されている。
- ・ Jannette Prins・Femke van der Wilt・Chiel van der Veen・Dieuwke Hovinga (2022), Nature play in early childhood education: A systematic review and meta ethnography of qualitative research, Psychol., 10 November 2022 Sec. Environmental Psychology
- ※自然遊びが子どもの創造性や社会的スキルの向上にどう寄与するか、教師と子どものかかわりが自然遊びの質をどう向上させるなどについて報告されている。
- ・ Kylie A. Dankiw・Saravana Kumar・Katherine L. Baldock・Margarita D. Tsiros (2023), Parent and early childhood educator perspectives of unstructured nature play for young children: A qualitative descriptive study, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0286468>
- ※自然遊びが子どもの感情調整や自然とのかかわりを促すなどの好ましい効果に加え、保護者や教育者が直面する障害についても報告されている。
- ・ 井上美智子・無藤隆 (2007), 幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態, 社会福祉研究 教育福祉研究 (33), 1-9
- ・ 高野牧子・打越みゆき・山田英美 (2011), 保育者養成における野外教育, 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol. 6, 15-20
- ・ 遠藤秀平・山本清龍 (2022), 小学校児童の自然遊びの現状と経験と短期宿泊型野外体験が環境意識の変化に及ぼす効果, 日林誌104, 10-17

## Summary

I have been in charge of the "Environment" subject area in the Guidelines for Kindergarten Education and the Guidelines for Nursery Centers, and have given lectures on nature play and nature experiences for young children on many occasions. In the course of my teaching, I have often felt that recent years have seen a lack of nature experiences among students. I wondered whether this was a characteristic of the students at training institutions for nursery school teachers, etc., or whether it was a general situation in a wide range of fields, and decided to examine nature play and nature experience from a broader perspective by conducting a literature survey and questionnaire survey of students in our department and making comparisons.

The literature review revealed that people have been moving away from nature experiences for considerably longer than initially anticipated, and that this is a global trend, not limited to Japan. Furthermore, it was found that even among the parents' generation, there is a lack of experience with nature play, and that the parents themselves do not know how to play. It is feared that this trend is likely to continue and accelerate as it cascades down the generational chain. In this situation, training institutions have an important role to play. In addition, the results of a questionnaire survey conducted on students of the Department of Child Care and Education enabled us to grasp the students' awareness of nature and nature experiences and their actual conditions.

In this paper, based on the findings, I summarized the problems related to nature experience and nature play, and described the direction of their solution. In the future, I would like to introduce some of these issues into my lectures, embody them, devise appropriate evaluation methods, and improve them through repeated verification. In addition, to ensure that learning is not limited to the classroom, I intend to conduct curriculum studies, as well as to work on building partnerships with the community and external organizations.